水産科学の分野で活躍する女性たち 55

Dynamic Women@Fisheries Science 55

これまでの研究生生活を振り返る

—後輩達へ向けて—

井上菜穂子

日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科

NAOKO GOTO-INOUE

*Department of Marine Science and Resources, College of
Bioresource Sciences, Nihon University, Fujisawa,
Kanagawa 252-0880, Japan*

この度、このような記事を執筆する機会を与えていただきましたこと、誠にありがとうございます。水産科学の分野で「活躍する」には程遠いキャリアではございますが、これまでの自分の研究生生活を振り返って、この記事を書こうと思います。

はじめに、これまでの略歴を簡単に申し上げます。大学院卒業後、独立行政法人（理化学研究所）、自然科学研究機構（岡崎統合バイオサイエンスセンター）、国立大学（浜松医科大学）、および公立大学（首都大学東京）において任期付の特任助教として勤務し、現在、私立大学である日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科にて、専任講師として研究と教育に従事しております。主な研究分野は分析化学であり、質量分析計、特にマトリクス支援レーザー脱離イオン化法（MALDI法）を用いた生体分子の構造解析手法の確立、及びその応用に従事してまいりました。MALDI法は2002年に島津製作所の田中耕一先生がノーベル賞を受賞された分析手法であり、生体高分子の構造解析を行う上で大変画期的な手法です。理化学研究所在籍時に、大変幸運ながら当時最先端のMALDI型質量分析装置のノウハウを理化学研究所フロンティア研究システムの鈴木明身先生と鈴木實先生に教えていただきました。その後、MALDI法を利用した生体分子のイメージング手法の確立（質量分析イメージング法）を試みられておられた浜松医科大学の瀬藤光利先生（当時は岡崎統合バイオサイエンスセンター）のご指導を受けるためJST先端計測開発事業に参画し、新しい装置の開発及びその応用法の確立に従事してまいりました。分析化学の分野における解析試料は多岐に渡りますが、私が特に興味を持ったのは骨格筋でした。そこで、質量分析イメージングの手法をもちいて骨格筋の脂質代謝を明らかにするため、首都大学東京の藤井宣晴先生の元で最先端研究開発プログラムに参画しました。その後、これまでの知見を活かし、ダイナミックな骨格筋代謝を行う水圏生物を用いた研究に従事するため、日本大学生物資源科学部に移ってまいりました。水産科学の分野に参画してから4年と日は浅いですが、多様な生理機能を持つ水圏生物の面白さに魅了される毎日を過ごしております。複数の研究

機関での経歴はおそらく水産科学の分野では異色かと思いますが、自分ならではの視点から、水産科学研究に貢献していきたい、と考えております。

私生活においては大学院終了後に結婚し子供を出産しました。今まさに、仕事と家庭の両立に四苦八苦している状況です。独立行政法人労働政策研究・研修機構の統計によると、共働きと専業主婦の世帯数は1995年に逆転し、共働き世帯数が大きく上回るようになりました。2017年時点では、その差は2倍強に近い開きをみせています。この統計は、男女共同参画が現代社会に普及していることを意味していると感じます。しかし、長いキャリアの中には妊娠・出産などの女性特有のライフイベントが起こりうるため、「働き続ける」ことには問題点もまだ残っていると感じております。女子学生の中にも、そういった漠然とした将来の不安によって、チャンスを掴みにくくなっている人も多いのではないのでしょうか。そんな時、ぜひ実行してもらいたい解決策として、自分の身近で「理想とする人物像」を見つけてほしいと思います。私も夫の転勤による転職などを経験し、自分のキャリアの選択で悩んでいた時期がありました。そんな時、自分の周りに「理想とする人物像」を見つけることができ、後悔のない選択をできた、という経緯があります。理想は人によって様々だと思いますが、私が見つけた理想の人物は、大学院の指導教官の先生でした。先生は、理化学研究所でバリバリ働く女性研究者でした。先生はポスドクとして職を転々としながらも着実に自分のキャリアを積み重ね、その間に子育てもする、しなやかな人生を送っていました。「家族の都合によって、職を変えなければいけない」、「子育て期間中は仕事ができない」、そういったことをマイナスに捉えず、常に前向きに、今、目の前にあるチャンスを絶対に逸さない。そういった生き方は、私の人生の選択において、とてもいい教訓を与えてくださったと感じています。その結果、度重なる転職や出産、育児休暇を経て、仕事に復帰し充実した毎日を送ることができている、と感じています。そして、当時は苦境だと思っていた度重なる転職も、経験して得られた知識や培われた人脈など、すべてプラスの出来事として振り返ることができています。

研究者としての14年間を振り返って実感として思うのは、挑戦しなければチャンスなど訪れない、失敗をしなければ成功はない、ということです。若手の皆さんは、どうか挑戦を恐れることなく、今しかできない色々な課題に挑んでほしいと思います。

最後に、私のような新参者を快く受け入れてくださり、現在共同研究を行ってくださっている水産科学分野の先生方にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。今後ともご指導の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。